

報告

シンポジウム「電子音楽におけるアーカイブの方法論
ーコンサートアーカイブにおける実践的視点からー」開催報告
Report of Symposium “Methodology of Archiving Electroacoustic Music
ー From a Practical Perspective in Concert Archiving”

鈴木 悦久

Yoshihisa SUZUKI

名古屋学芸大学

Nagoya University of Arts and Sciences

渡邊 愛

Ai WATANABE

東京藝術大学

Tokyo University of the Arts

概要

2022年11月13日に東京藝術大学千住キャンパスで行われたシンポジウム「電子音楽におけるアーカイブの方法論ーコンサートアーカイブにおける実践的視点からー」についての報告を行う。「日本電子音楽協会コンサートのアーカイヴ基盤整備事業(2020年度)」に端を発した当該協会におけるデジタルアーカイブ活動によって、現在では37のコンサート、約147作品がデータ所蔵されている。これらのアーカイブを活用して、今回のシンポジウムでは当該協会の設立準備期間に行った「ELEM'91(東京,1991年10月7日)」、「第1回定期演奏会(東京,1992年11月3日)」、そして初の海外公演となった「electronic access(オーストリア リンツ,2004年12月15日)」を取り上げ、電子音響音楽におけるアーカイブの価値や方法について検討が行われた。議論の争点は再演における課題が中心となり、さまざまな創造的手法や技法がテクノロジーと共に更新される電子音響音楽において、再演を軸にアーカイブ活動を継続する視点が提示された。

A report on the symposium “Methodology of Archiving in Electronic Music” held on November 13, 2022 at Senju Campus of Tokyo University of the Arts. The digital archiving activities of The Japan Society for Electronic Music (JSEM), which began with the “JSEM Concert Archiving Infrastructure Development Project (FY2020),” currently holds data on 37 concerts and approximately 147 works. From these archives, three concerts, “ELEM'91 (Tokyo, October 7, 1991),” “The 1st Concert (Tokyo, November 3, 1992),” and “electronic access (Linz, Austria, December 15, 2004)” were selected for this symposium. We discussed the value and methods of archiving electroacoustic music.

The main point of contention in the discussion was the issue of repeated performances of a work, and the viewpoint of continuing archival activities based on repeated performances as presented in the field of electroacoustic music, where various creative methods and techniques are updated along with the technology used in said performances.

1. はじめに

2022年11月13日、東京藝術大学千住キャンパスにて、シンポジウム「電子音楽におけるアーカイブの方法論ーコンサートアーカイブにおける実践的視点からー」(日本電子音楽協会30周年記念事業)を行った。このシンポジウムは、電子音響音楽が音楽とテクノロジーの融合による新たな音楽様式であるという観点から、録音や映像などの記録物からは読み取ることできかない技術的側面および上演環境や、作品の詳細な内容について、コンサート記録を元に登壇者と共に紐解いていくことを目的とした。今回のシンポジウムでは、日本電子音楽協会が所蔵する1990年代から2000年代に行われた3つのコンサートを取りあげ、当時、日本電子音楽協会の運営に深く携わっていた、西岡龍彦氏(日本電子音楽協会 元会長)と岩崎真氏(日本電子音楽協会 元事務局長)の両氏をゲストとして招き、日本電子音楽協会会長の水野みか子氏を交えて、当時の作品を取り巻く環境のお話を聞き、今後の電子音響音楽におけるアーカイブの方法論について議論を交わした。

本稿では、取り上げたコンサートごとに、議論された内容を報告する。

1.1. 開催概要

シンポジウム「電子音楽におけるアーカイブの方法論ーコンサートアーカイブにおける実践的視点からー」

実施日 2022年11月13日(日) 13:30-15:30

実施場所 東京藝術大学 千住キャンパス 第一講義室

登壇者

- ・西岡 龍彦(日本電子音楽協会 元会長)
- ・岩崎 真(日本電子音楽協会 元事務局長)
- ・水野 みか子(日本電子音楽協会 会長)
- ・渡邊 愛(日本電子音楽協会 理事)
- ・鈴木 悦久(日本電子音楽協会 理事)



図 1: シンポジウムの様子(右から、岩崎真氏、西岡龍彦氏、水野みか子氏、鈴木悦久、渡邊愛)

2. コンサート記録から

2.1. ELEM '91

1991年10月7日に行われた「ELEM '91」は、日本電子音楽協会の発足が固まった事をきっかけに開催されたコンサートである。これまで、このコンサートについては記録映像と会場で配布されたプログラムが残されているのみで、上演に関する技術的な詳細については明らかではなかった。そのため、作品がどのような方法で上演されていたか不明なままであり、この点に焦点をあててお話を聞いた。

まず、作品のリアルタイム性についてである。当時、電子音響音楽にコンピュータが導入され始め、リアルタイムに音響を出力することが可能になった。しかし、リアルタイムに音響が出力されているのか、確定された音響を再生しているのかを作品の映像記録だけで判別することは困難である。これは、電子音響音楽における分類にも影響することであるため、アーカイブの観点からも重要な事柄である。これについて、当時の出演者であった登壇者の両氏より作品の技術的側面や

上演方法についての詳細を聞くことができた。さらに西岡氏からは、「ELEM '91」が開催された当時の音響機器の変化について、アナログからデジタルの移行期に作曲家が創作にどのようにアプローチしていたかという自身の体験談から、音響機材の変化による音楽表現の変化も示唆された。このように、とりわけ当時の機材が入手困難な場合、作品内での音響機材の機能や表現方法については上演時の状況を知る関係者からのヒアリングが有効であることが確認できた。



図 2: ELEM '91 (西岡 龍彦《The Changing Circle II (自在圏)》)

公演タイトル ELEM '91

日時 1991年10月7日

会場 サントリーホール 小ホール

曲目

- ・西岡 龍彦《The Changing Circle II (自在圏)》
- ・松本 日之春《初めての鳥》
- ・岩崎 真《n・i・k・i・e》
- ・南 弘明《電子交響曲 第4番》
- ・千住 明《アンリの空》
- ・松下 功《オプティカル・スコープ》

2.2. 日本電子音楽協会 第一回定期演奏会

1992年11月3日に行われた「日本電子音楽協会 第一回定期演奏会」のアーカイブからは、制作環境の話題から再演の可能性についても議論が展開された。「第一回定期演奏会」の会場配布プログラムには、楽曲の開発言語と使用機材が記されているが、それらが楽曲内でどのように機能していたかは明確ではない。例として、寺井尚行氏の作品《[pá:siŋ]》(パッシング)のプログラムノート(図3)には、開発言語と使用機材が記されているが、コンピュータプログラムの処理によっ

て出力されたデータが、音響機材を通じてどのような音響を生み出しているのかは、作曲者と、その作品に深く関わった関係者しか把握しえない。

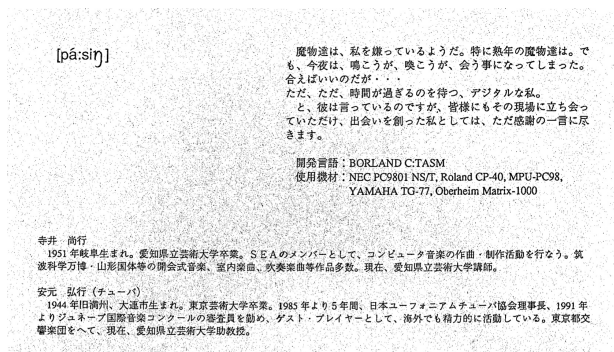


図 3: 寺井尚行氏の作品《[pá:siŋ]》のプログラムノート

この作品のように、初演から数十年経った作品を再度上演することについて、当時の技術的側面に詳しい登壇者からは、各機材がどのように機能していたかは概ね分かるが、当時と同じように作品を上演することは難しいのではないかと指摘があった。すなわち、電子音響音楽をこれまでの音楽作品と同様に再演できる状態で残すには、この分野に適したアーカイブ方法を検討しなければならない時期に来ていると言えよう。



図 4: 日本電子音楽協会 第一回定期演奏会 (岩崎 真《「Aria」》)

公演タイトル 日本電子音楽協会 第一回定期演奏会
日時 1992 年 11 月 3 日
会場 十字屋ホール
曲目

- ・ 岩崎 真 《「Aria」》
- ・ 大河内 俊則 《a ruling passion》

- ・ 岡崎 光治 《“碑の音—VII”—2 台のシンセサイザーのための》
- ・ 嶋津 武仁 《Territory III (領域 III) ...Wind & Time》
- ・ 寺井 尚行 《[pá:siŋ]》
- ・ 松本 日之春 《古の鳥 (L'oiseau d'autrefois)》

3. ELECTRONIC ACCESS

2004 年 12 月 15 日にオーストリアのリントで行われた「electronic access」は、現地の上演環境が見通せない海外公演ということもあり、再演作品を中心に構成されたコンサートである。登壇者の水野氏からは出品者として、またコンサートのオーガナイザーの一人として、コンサートの経緯や上演された作品についての詳細を聞くことができた。特に興味深かったのは、南弘明氏の作品《語りと電子音による「蜘蛛の糸」》についてである。この作品は 1977 年にアナログの電子音で制作され、1988 年にデジタルの電子音によって新しく制作された作品である。1994 年 1 月には日本電子音楽協会 第二回定期演奏会で、さらに 10 年後の 2004 年にこの公演で再演されるなど、20 年以上に渡って上演されてきた作品である。水野氏によると、作曲者の南氏はこの時の再演のために、作品を同じ機材で作直しており、現地の上演環境に対応できるようにしていた。

このエピソードは、アーカイブの観点から見ると非常に示唆に富んでいる。電子音響音楽作品において、上演された時期や環境によって作曲者が自ら作品を改訂するという事は、作品の全体像を残し、今後の研究や再演に役立つアーカイブの方法論を検討する上で、作品の初演時の記録と併せて改訂時の記録も残しておく必要があると考えられる。南氏の作品の他にも、チャンネル数などの上演環境が異なる状況を想定し、いくつかのバージョンが残されている作品についても話題に上り、様々な作品に対応するアーカイブの方策が必要という認識で一致した。

公演タイトル electronic access

日時 2004 年 12 月 15 日

会場 Göllicher-Saal Anton Bruckner Privatuniversität (Austria Linz)

曲目

- ・ 松井 昭彦 《Nature, for Koto and electronics》
- ・ 寺井 尚行 《The stream》
- ・ WEIXLER, Andreas/CHUNG, Se-Lien 《Erinnerung in Jedem Laut》
- ・ 水野 みか子 《白い橋の上で》
- ・ 南 弘明 《語りと電子音による「蜘蛛の糸」》



図 5: electronic access (水野 みか子 《白い橋の上で》)

渡邊 愛 (Ai WATANABE)

東京藝術大学、昭和音楽大学、玉川大学各非常勤講師。日本電子音楽協会理事。先端芸術音楽創作学会会員。女性作曲家会議メンバー。東京音楽大学大学院、パリ国立地方音楽院修了。東京芸術大学大学院博士後期課程修了。博士 (学術)。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂るか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。

4. 終わりに

本シンポジウムでは、1990 年代から 2000 年代に日本電子音楽協会が行った 3 つのコンサートを取り上げ、これまで不明な点が多かった当時の作品と上演に関する背景が明らかになった。それに合わせて、電子音響音楽作品の上演における特殊性も浮き彫りとなり、今後の研究や再演につながるアーカイブの方法論を検討するには、まずは網羅的に作品を調査する必要があると考えられる。特に技術的側面については、作曲家や上演に携わった関係者からのヒアリングが有効であることが今回のシンポジウムで示された。有用なアーカイブ基盤を構築するには、一刻も早く取り組まなければならない。

本シンポジウムを通じて得た課題を今後の取り組みに活かし、電子音響音楽におけるアーカイブの方法論を具体的に提案できるよう、研究を進めたい。

5. 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22K00219 「日本の電子音響音楽作品における再演のためのアーカイブの方法論構築」の助成を受けて行われているものである。

6. 著者プロフィール

鈴木 悦久 (Yoshihisa SUZUKI)

昭和音楽大学で打楽器を、情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) で作曲を学ぶ。アルスエレクトロニカ 2006 デジタルミュージック部門ホノラリーメンション賞受賞 (Mimiz 名義)。近年、電子音響音楽におけるアーカイブの方法論を実践的に研究している。名古屋学芸大学准教授。JSEM 日本電子音楽協会理事。JSSA 先端芸術音楽創作学会運営委員。